

令和 元年 9 月 9 日現在

機関番号：82705

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07411

研究課題名（和文）聴覚障害幼児児童生徒の作文学習を支援するフォーマットの開発に関する研究

研究課題名（英文）Study on the Development of Formats to Support Writing in Children with Impaired Hearing

研究代表者

山本 晃 (Yamamoto, Akira)

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所・研究企画部・総括研究員

研究者番号：70804996

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、書く力が十分に育っていない聴覚障害児への一つの指導の手立てについて検討した。全国調査の結果から、聾学校経験年数に関わらず、聾学校教師の94.2%が絵日記・日記・作文の指導について、難しさを感じていることが明らかになった。また、聾学校教師はその難しさを感じつつも、様々な指導の工夫を、発達年齢に合わせて行っていることが示された。その中で、「話のやりとり」を軸とした指導が、全体的に高い割合を示していた。それらの「話のやりとり」を行うことを明確に位置付けたフォーマット等の活用で、書くことが苦手な聴覚障害児が、書くことへの抵抗感を減らし、書くことができた事例を見ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の中の調査によって、聾学校の教師が、絵日記・日記・作文の指導について、聾学校経験の長さに関わらず、難しさを感じている教師が94.2%であることが示された。しかし、その難しさを感じつつも、聾学校では様々な指導の工夫が、発達年齢に合わせて行われていることが、900名中805名の記述から示された。そして、その工夫の中で、「話のやりとり」を軸とした指導が、全体の53%と多いことが示唆された。それらの「話のやりとり」を行うことを明確に位置付けた絵日記・日記・作文フォーマットの活用で、書くことが苦手な聴覚障害児が、書くことへの抵抗感を減らし、書くことができた事例を見ることができた。

研究成果の概要（英文）：In this study, I examined a method of teaching children with hearing impairment who have not developed adequate writing skills. A national survey revealed that 94.2% of teachers in schools for the deaf experienced difficulties with diaries, diaries with pictures, and writing compositions regardless of their years of experience working in a school for the deaf. Furthermore, the survey indicated that, while experiencing such difficulties, the teachers devised various teaching methods suitable to the developmental age of the students. Among the methods devised, teaching based on having a “communication” was most prevalent. As a result of using formats that clearly positioned having a “communication”, reluctance to practice writing decreased in some children with impaired hearing who were not good at writing, and they were able to write.

研究分野：聴覚障害教育

キーワード：聴覚障害教育 作文指導 指導の工夫 作文フォーマット

1. 研究開始当初の背景

特別支援学校(聴覚障害)(以下、聾学校という)では、聴覚障害児の言語力の向上・定着をねらいとして、日常的に、絵日記・日記・作文を使った日本語文章の指導を行っている。

先行研究でも「言語は耳で聞いて学習していくものであるため、生まれつき、または生育歴の早い時期から難聴であれば、ことばの発達は多かれ少なかれ遅れてくる。(大和田・中西,1966)、「言語発達の遅れは聴覚障害教育が始まった頃からの課題と問題点であり、この問題の改善のために、実践レベルでも研究レベルでも多くの取り組みが行われてきた。」(井原他,1982)等とされている。つまり、多くの聴覚障害児は日本語の「話し言葉」が不十分のまま「書き言葉」に移行し、文を書く力が十分に身につけていない聴覚障害児も少なくない。従来から言語発達における困難の解決に向けて、聾学校の教師や研究者が努力を傾けてきたが、現在も聴覚障害児教育の課題の一つとなっている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、書くことに抵抗感がある聴覚障害児のための絵日記・日記・作文を書く場合の支援となるフォーマットを作成することである。このフォーマットの活用により、基礎的な作文能力を身につけさせるきっかけとなることを目的とする。

3. 研究の方法

研究目的を達成するため、全国聾学校長会に加盟するすべての国内の聾学校の幼稚部、小学部、中学部、高等部本科、高等部専攻科の教師を対象とした調査を行う。調査内容は、絵日記・日記・作文指導でどのような課題を感じ、現在、どのような指導の工夫をしているかについての調査を行う。

「指導の工夫」の記述については、担当する学部ごとの自由記述式の回答データをもとに、計量テキスト分析を採用した。テキストマイニングにより「指導の工夫」に関して研究者の規範や想いを基底とした恣意的な分析を排除し、客観的に指導の工夫の内容を分析する。

具体的にはテキスト分析のためのソフトウェア KH Coder(Version3.Alpha.09.h)を用いてデータをコーディングにより数値化したのち、内容分析を行う。そして、その調査結果を踏まえ、絵日記・日記・作文の各発達段階別のフォーマット試案を作成する。

研究協力校にて、そのフォーマット試案を実際に活用してもらい、聴覚障害児へのインタビュー実施と担当教師へのインタビューを実施し、改善点について検討する。

研究協力校は栃木県立聾学校、横須賀市立ろう学校、静岡県立浜松聴覚特別支援学校、京都府立聾学校、岡山県立聾学校である。

4. 研究成果

(1)聾学校教師の絵日記・日記・作文等の指導における困難さに関する調査

聾学校教師の絵日記・日記・作文等の指導の困難さ

全国の聾学校に調査を実施した(平成30年度)。回答者は、アンケートを配布した86校中81校から900名であった。本研究では、所属学部不明の回答(27名)も含み、分析の対象とした。本調査は、幼稚部教師から高等部本科教師まで、偏りのない回答数であった。高等部専攻科は設置している聾学校数が少ないため、他と比較すると少人数になる。

はじめに聴覚障害児への絵日記・日記・作文等の指導についての困難さについて尋ねたが、Fig.1のように「とても困難さを感じる」を選択した教師が50.0%であった。「少し困難さを感じる」を選択した教師が44.2%であり、合わせると、94.2%の教師が絵日記・日記・作文指導等に対して困難さを感じているという結果が示された。

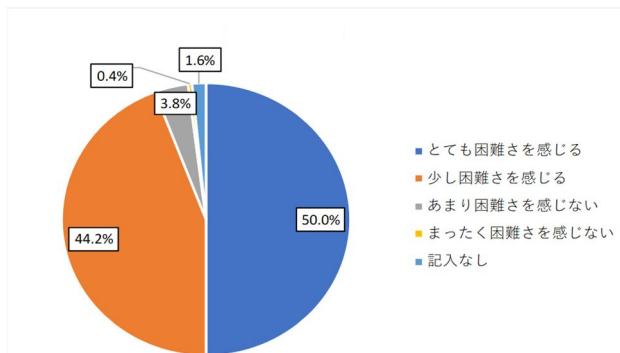


Fig.1 絵日記・日記・作文等の指導についての困難さ

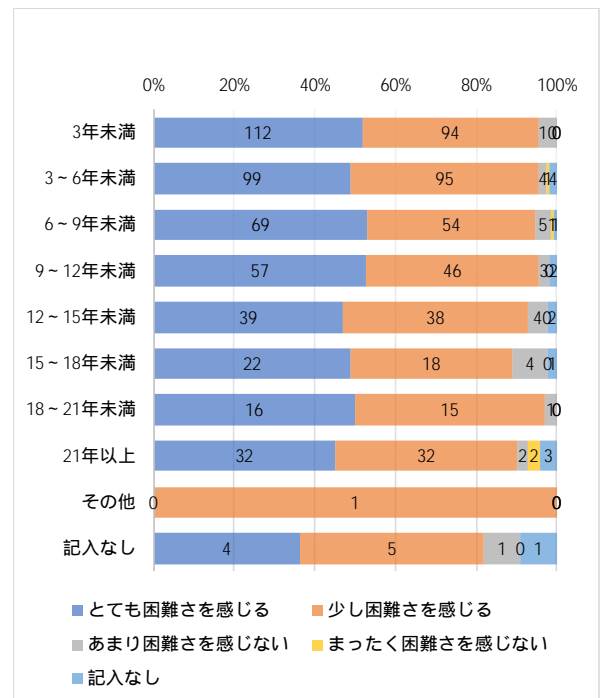


Fig.2 聾学校勤務経験年数別絵日記・日記・作文等の指導についての困難さ

また、Fig. 2のように、経験年数に関わらず、どの年数幅においても90%以上の教師が困難を抱えているという結果が示された。

このことは、聴覚障害児の聞こえにくいという障害の二次的な障害として、言語獲得が難しく、生活言語から読み書きに結び付けていくことに対して、大きな困難があることを示している。つまり、聾学校の経験年数を重ねた上で指導を行っても、聴覚障害児の書き言葉の獲得は課題があるということである。

また、日常の指導において、絵日記・日記・作文等の指導で、どのような指導が大切であるかについては、「語彙を増やす指導」とする回答が900名中523名と一番多かった。つまり、聴覚障害児の生活言語が少ないという実感のもと、語彙を増やす指導に重点を置く必要があると考えている聾学校教師が多いということが考えられる。

聾学校教師の絵日記・日記・作文等の指導における指導の工夫

ここでは、聾学校教師の絵日記・日記・作文指導における指導の工夫の一部を記す。

【絵日記指導】

絵日記指導と実生活を結び付けて、語彙を増やす点、絵日記を書かせることが主ではなく、絵日記を使って、どのようなやりとりをするかという点、子どもが絵日記を見て、話をしたくなるようなものにする点、教師が話し過ぎない点等が多く挙げられた。

また、絵日記の題材については、子どもの気持ちが動いたもの、興味があったもの、1番心に残ったこと、特別な事柄を選ぶのではなく、子どもの話したい内容、生活や遊びの中で、興味をもったこと・楽しかったこと・驚いたこと、そして、日常生活の中での発見（出来事）を題材にするという記述が多く挙げられていた。

具体的な指導例については、保護者や教員と話のやりとりをしながら、子どもの書きたいことを言語化していくという記述が多かった。具体的には、「だれ、何、どうした、どこ、どうして」など、詳しく質問していくという方法である。また、感情や理由など、絵に表われていないことなどもやりとりしながら、言葉に変えていくようにしている記述も多くあった。手話で表現してくる子どもについては、手話を日本語に置き換えながら、取り組んでいるという実践もあった。話のやりとりの場面では、関連するもの（イラスト・写真・絵辞典等）を活用しながら、内容を膨らませていくようにしているという記述が多く見られた。つまり、資料も使いながら、経験と結びついた言語を深め広げるよう工夫が行われているということである。

【日記指導】

日記指導についても、指導者の心構えとして、経験と結びついた言語を深め広げるよう工夫しているという面は引き続いてきた。

日記の題材については、絵日記とほぼ同様に、意欲的に子どもが書けるように、その日の出来事だけではなく、自由なテーマで書かせていたり、教師が題材を提示したり、1つのことについて詳しく掘り下げて書くということも挙げられていた。

具体的な指導例については、絵日記同様、話のやりとりをしながら、または話のやりとりをしてから、日記に取り組みさせるという記述が多かった。小学部以上の段階では、書き言葉が理解できるため、教師が日記の添削やコメントにも配慮しているということが挙げられた。例えば、自分の感じたこと、考えたことが理由を添えて、自分なりの言葉で表現されている所について、コメントを返したり、「～が楽しかったです」等で終わっている子に関しては「何が」「どうしてそう思ったのか」を書いてくれるとうれしい。」とコメントを書いたりするということである。また、コメントには、必ず言葉をひとまわり広げる書きこみをさせているということも挙げられた。例えば「さくらが、さきはじめました。」 「さくらが、(ほ)()(ろ)()はじめました。」とするようなコメントである。

コメント以外にも、スペースが余った場合、関連の言葉の文例や活用例を問題にして提示しているということも挙げられた。

日記指導となると、書き方に関する例を提示する指導もいくつか見られた。例えば、書き出しの工夫例をノートに貼り、いつでも参考にできるようにしたり、気持ちを表す言葉の一覧を年度初めに配布したり、日記の中に必ず気持ちを表す言葉を入れるよう指導している記述もあった。

【作文指導】

作文指導は、絵日記、日記と同じように、本人が書きたい、伝えたいと思うことを書かせることの重要性が書かれた記述がある一方、例えば進学に向けて、まず、作文のテンプレートをマスターさせ、入学試験対策を行っていることも挙げられた。

作文の題材についても、実際に経験したことをもとにして書く修学旅行や校外学習等の行事作文以外に、教師がテーマを決めて書かせているケースも見受けられた。

具体的な指導では、書き方のパターンを指導するという記述もあった。一番多かったのは、構成（始め、中、終わり）を作文メモのような形で、あらかじめ書かせるという手立てである。メモをもとに、その段落を膨らませながら、作文に取り組みさせているという記述が多かった。

感情表現を表す語彙について、手話と指文字で確認して文を書かせていることも挙げられた。

また、作文のテーマについて会話をし、出てきた言葉を一度全て板書し、必要なものだけをメモさせる方法を用いている事例も挙げられた。

PCを用いた作文指導の例も挙げられた。生徒とやりとりをしながら、生徒が書いた文章を膨らませるように心がけている事例もあった。そもそも短い文章しか書けない生徒には、具体的にどんなことが心に残ったのか、まずは単語で書かせ、それらを組立てるように文を作らせる。書

きたい内容を詳しく説明させる。「いつ、誰が、どのように」等を付け加えることで長い文章が作れ、書けることを実感してもらうようにしているということも挙げられた。

さらに、書き上げた後に、発音と手話で表現させ、自分の書きたかったことを確認させている事例もあった。

また、新聞記事（コラム欄）の要約をさせている事例も多くあった。

このように、全国の聾学校教師の現場での実践には、絵日記・日記・作文指導のヒントになるような工夫が多く含まれていると考えた。

(2)聾学校教師の絵日記・日記・作文指導において重点を置いている手立て

日常の指導において、絵日記・日記・作文・その他の文章の指導で、教師がどのように工夫しているのかについて記述回答を求めた。回答者全体の 89.4% (900 名中 805 名) の教師が回答した。この中から所属が特定できた 784 名の回答をテキストデータとし、計量的な分析を行った。具体的には、全体の指導の工夫の傾向を見るために、教師と生徒の「やりとり」に関するコード (Fig. 3) を設定し、このコーディングルールに基づいて、幼稚部、小学部、中学部、高等部本科、高等部専攻科別にコードの出現数を集計した。

話す	広げる	ひろげる	聞く	きく	引き出す	ひきだす	深める	ふかめる	振り
返る	ふりかえる	話し合う	聞き取る	問いかける	付け足す	つけたす	つけ足す		
ひろげる	拡げる	掘り下げる	ほりさげる	お話し	お話	対話	話しかける		
やり取り	やりとり	はなし	話	質問	会話	ふくらませる	コミュニケーション		
関わり	共感	表出	発問	話し合い	引き出し	問答	おしゃべり	一問一答	尋ねる
たずねる	聞き出す	伝える	つたえる	つけ加える	話し込む	問う	とりあげる		
ききだす	つつこむ								

Fig. 3 やりとりに関連した言葉

全体の平均は 53% で、「幼児児童生徒とのやりとり」について工夫している教師が多いことが示唆された。コードの出現数は幼稚部が最も多く、指導の際に話のやりとりを重視していた。次に小学部、中学部、高等部専攻科、高等部本科の順であった。

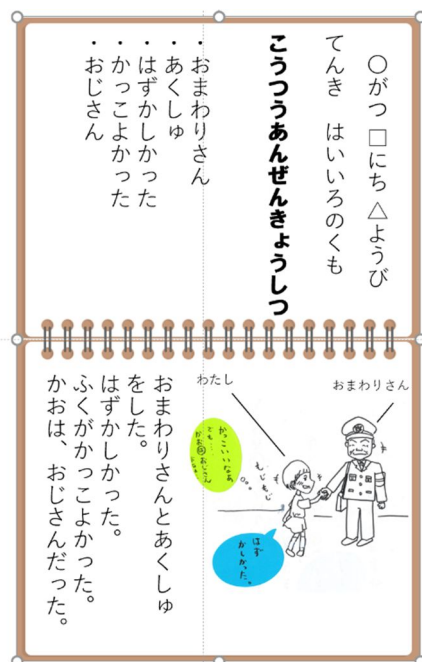
(3)絵日記・日記・作文を書く場合の支援となるフォーマットの作成

前記(1)(2)の結果を踏まえ、書くことに抵抗感がある聴覚障害児のための絵日記・日記・作文を書く場合の支援については、書くテーマに関した話のやりとりを、教師や保護者と聴覚障害児が行った後に書くことが有効であると考えられる。

そのような考えのもとに、次のようなフォーマットを作成した。本稿に掲載するものは、試行を重ね、最終的に作成したものである。

ただし、絵日記、日記、作文指導は子どもの実態に合わせて行われるべきであり、本研究で紹介するフォーマットは、方法の一つであることを記す。

【絵日記のフォーマットの一例】



従来から幼稚部の絵日記は、スケッチブックに書き、毎日一枚または二枚の紙に「○が つ にち ようび」を書き、できごとを絵に表し、その絵に合った話を書いたものである。

本研究で考案したフォーマット (Fig. 4) は、次のようなものである。 天気の話を書く。(子どもの言葉の力に合わせ「はれ」「くもり」「あめ」のような単純な言葉ではなく、「むしむし」「はいいろのそら」「ざーざー」等の状態がよくわかるような言葉を使えるようにしていく) 書きたい内容のテーマを文字として明確に書く。(何のことに話をして書くかを明らかにするため) 話のやりとりで使った言葉を書く。(身につけてほしい言葉を話し手、受け手ともに明らかにするため) 絵にネーミングする。(描いたものが、誰なのか、何なのかを明確にするため) 吹き出しを書く。(絵に描いた登場人物の考えや気持ちについて考えさせるため)

Fig. 4 絵日記のフォーマットの一例

【日記のフォーマットの一例】

従来、小学部で使われている日記帳は絵を描く欄はなく、マス目形式のものである。

本研究で考案したフォーマットは、次のようなものである。 天気の話を書く。(子どもの言葉の力に合わせ、「はれ」「くもり」「あめ」のような単純な言葉ではなく、「むしあつい、あせがとまらないあつさ」「どんより、なきだしそうなそら」「どしゃぶり、たたきつけるようなあめ」等の状態がよくわかるような言葉を使えるようにしていく) 絵をもとにした話のやりとりのメモを書き、残しておく。(話した内容を文字として残しておくことで、書くことへの抵抗感を軽減するため) 絵にネーミングする。(描いたものが、誰なのか、何なのかを明確にするため) 吹き出しを書く。(絵に描いた登場人物の考えや気持ちについて考えさせるため) 日記文を書く際に使ってほしい言葉を書く。(身につけてほしい言葉を明らかにするため)



Fig.5 日記のフォーマットの一例

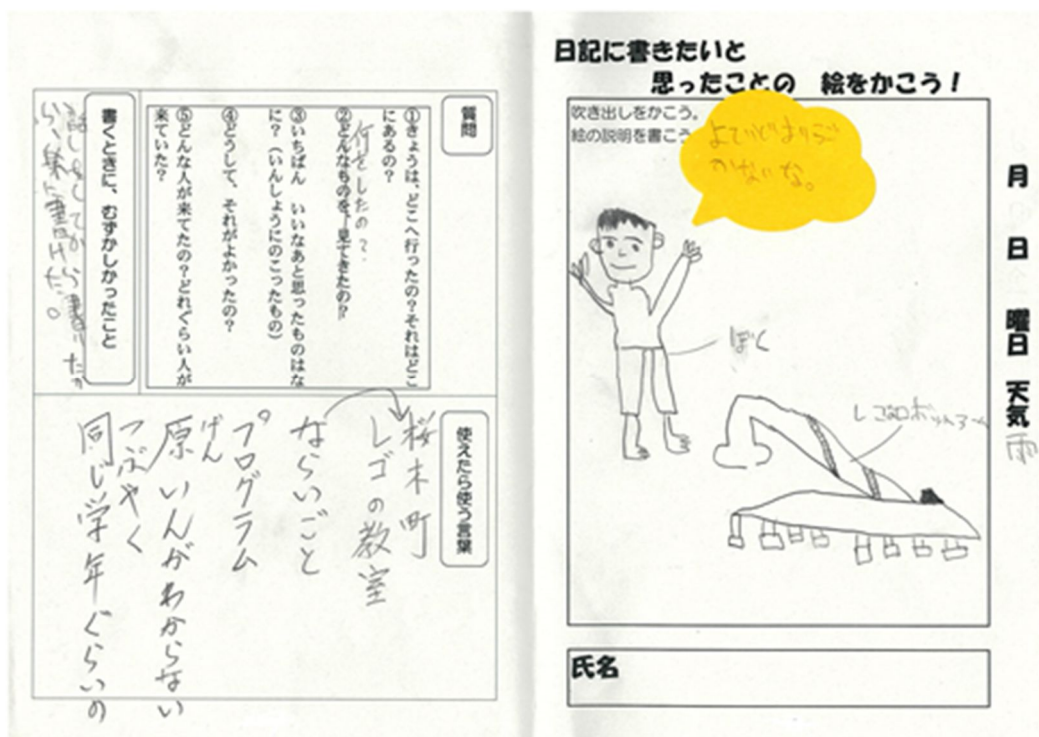


Fig.6 日記のフォーマットの一例

人名・固有名詞のため隠しました。

また、違う形のフォーマットとして、Fig.6のような、あらかじめ、行事や話題ごとに、児童への質問を書いたものも作成した。Fig.6は、お出かけした際の質問の一例を書いたものである。これについては、話のやりとりの参考として、作成したものであり、これをそのまま活用することもできるが、基本的には目の前の子どもと話のやりとりをしていく形になると考える。

Fig. 5, Fig. 6のフォーマットとも、実際の日記文は、このフォーマットを書き終えてから児童がノートや原稿用紙に、これを見ながら書くというものである。

【作文指導のフォーマットの一例】

また、作文指導においても、書くことに対して抵抗感がある聴覚障害児の場合、話のやりとりをしてから、文章を書くという段階を経ることも手立ての一つと考えられる。特に中学部生や高等部生に、新聞記事を取り上げた活動は多く見受けられる。Fig.7は、新聞を活用した形のフォーマットである。これについても、生徒の状況次第で、活用の仕方は変わるが、特徴としては次のような点が挙げられる。読ませたい文章と図表のみフォーマットに貼る(焦点化して話し合うため) あらかじめ、教師が話し合い(やりとり)をすることについて、記載しておく(何についてやりとりをするかについて明確にするため) キーワードについて、絵も入れて意味を書きしておく(意味調べを少し軽減させ、話のやりとりや書く活動に重点を置くため)

最後に、本研究による成果をまとめると、聾学校の教師が、絵日記・日記・作文の指導について、聾学校経験の長さに関わらず、難しさを感じている教師が94.2%であることが示されたこと。その難しさを感じつつも、聾学校では様々な指導の工夫が、発達年齢に合わせて行われていることが、900名中805名の記述から示されたこと。その工夫のなかで、「話のやりとり」を軸とした指導が、全体的に高い割合を示したこと。そして、それらの「話のやりとり」を行うことを明確に位置付けた絵日記・日記・作文フォーマットの活用で、書くことが苦手な児童生徒が、書くことへの抵抗感を減らし、書くことができた事例を見ることができたことである。

以上、書くことに抵抗感がある聴覚障害児の絵日記・日記・作文指導の一つの手立てについて考察を行ってきたが、絵日記・日記・作文指導については、フォーマットが優先されるべきものではない。大切だと思われることは、調査結果からも明らかなように、聴覚障害児との話のやりとりであると考えられる。そのやりとりの際に活用できる可能性があるものとして、フォーマットを考えたい。

今後、新しい手立てについての検討も必要であるが、現在聾学校で行われている手立てについて共有されていくことが必要である。



Fig.7 新聞を活用した形のフォーマットの一例 (引用：令和元年5月12日朝日中高生新聞)

5. 主な発表論文等

6. 研究組織